『神の書――イスラーム神秘主義と自分探しの旅』

アッタール著、佐々木あや乃訳注

東洋文庫 896　平凡社　二〇一九年八月

本書は、西暦十二世紀前半のイラン北東部ホラーサーンに生きた神秘家ファリードゥッディーン・アッタール Farīd al-dīn ʻAṭṭār（一二二九／三〇年没）の叙事詩作品『神の書 *Ilāhī-nāmah*』の散文による日本語訳である。イスラーム中世期の文献の冒頭に記される説教の序文の部分を除いた本文、約七千句のペルシア詩の全訳であり、十年以上に亘って継続した訳業の成果である。アッタールの詩作品の原典からの日本語への翻訳としては、本訳書は、神秘主義詩の精髄と言われる傑作『鳥の言葉』（『東洋文庫』から出版。韻文での翻訳）に続く二作目となり、ペルシア神秘主義文学の研究の進展をうかがわせる価値ある訳業といえる。

ペルシア詩と神秘主義の融合という点で、アッタールは神秘主義的要素を、その最も純度の高い姿で映しだす詩人であり、神秘主義者としての生涯が知られる人々の中に時にみられるような、世俗の王権との係わりという側面でも、アッタールにはその痕跡がないとされる。二〇〇三年にイランで出版された写本集『タブリーズ詩文集 *Safīnah-yi Tabrīz*』には、思弁哲学、論理学、シーア派思想、いずれにおいても当時最高の知性と言われたナスィールッディーン・トゥースィー Naṣīr al-dīn Ṭūsī（一二七四年没）が、その若き日、老師アッタールの神秘主義的境地を目の当たりにして心酔するようになった経緯がなまなましく伝えられている。アッタールは、通常の人間が暮らす現象界にありながら不可視界を生きる神秘家として崇敬の対象になっていた、文字通りの真正の神秘家である。

アッタールの作品は現在、残されているものはすべてペルシア語によるものであるが、作品の執筆年代が不明であるため、彼の思想的・文学的展開の詳細が判明しない。現時点では、一二二〇年以降、『神秘の書 *Asrār-nāmah*』、次に、本訳書の『神の書』、『鳥の言葉 *Manṭiq al-Ṭayr*』、『厄災の書 *Muṣībat-nāmah*』、『選択の書 *Mukhtār-nāmah*』の順番で作品が生み出されたとされることが多いが、未だ、作品の執筆年代の決定的な結論はだされていない。散文の作品としては、『神秘主義聖者列伝 *Tadhkirat al-Awliyā*』（以下、『聖者伝』とする。）がある。近年、イラン国内の研究者が、長年の緻密な写本の検証を通じて、従来はアッタール晩年の著作とされていた『聖者伝』が、アッタールの若い時代の作品である可能性に触れている。彼以前の神秘主義者たちの言葉や関連する逸話などを集めて研鑽を積んだアッタールが、文字通り、満を持して生み出したのが『鳥の言葉』や本訳書『神の書』などの一連の神秘主義叙事詩であったことが徐々に明らかにされてきている。

アッタールの作品の流れを知る上で、重要な要素の一つであると考えられるのが、アッタールと「理性（知性）ʻaql」との関係であろう。

陶酔の境地にある神秘家が超越的な世界の中で「理性」といかに向き合うのか、という視点からアッタールの作品をみる時、そこに神秘家としてのアッタールの思想的変遷の一端を読

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

み解く鍵があるように思われる。イスラーム聖法（シャリーア）を理解し、これを受け入れる上で理性（この場合の理性は、哲学上の理性（知性の働き）を指すのではなく、宗教的な脈絡での理性である）の行使を受け入れるが、あくまでも理性は、その傲慢を戒める限りで行使する、という立場の反映が見て取れるとされるのが『神秘の書』、『神の書』の二作品である。この詩作品は、愛を土台とする逸脱的神秘主義の萌芽を秘めながらも、それを大胆には語らず、イスラーム法の枠内の、禁欲主義的で穏健な傾向を基底に持つとされる。この思想的穏健さを当初のアッタールの世界観とすれば、『神秘の書』、さらに、本訳書『神の書』がより早い時期の詩作品であり、理性に対する「愛」の優越、理性への不信、理性の限界を憚ることなく詠んだアッタールの真骨頂『鳥の言葉』や、理性による魂の救済を否定し、精神界を飛翔する思惟（心の理性）をテーマとする『厄災の書』がアッタールの思想的成熟期の作品とされることとなる。（また、『鳥の言葉』、『厄災の書』にはシーア派への共感が読み取れることも特徴である）一方で、晩年になって、聖法の世界に近づき、逸脱的傾向から穏健な世界に至ったとする立場にたてば、おそらくこの逆の順番での作品の流れの理解が合理的なものとなろう。『神の書』には、「友よ、世界を映すジャムシード王の酒杯は理性と知れ」（第三四九五句：本訳書二六〇頁）とあり、ここでも、「神話的」神秘主義的世界と、（限定を付けた上での）理性が、矛盾することなく結びついているように思われる。

『神の書』の膨大な数の物語、逸話の語りに隠されたアッタールの真意を知るためには、魂に向かって語りかけられる「おお、麝香なる魂よ、芳香を振り撒けよ　あなた（魂、及び、魂を持つ人間）こそが神の代理者（アダムの子）」で始まる本訳書の「序章」（テクストでは「本書の初め」：本訳書：二一頁）で提示された内容の理解が不可欠である。

「序章」には、王でもありカリフでもある魂（及び、人間）の気高い地位が高らかに詠われた後で、この王（カリフ）の六人の息子が提示され、それぞれ、欲情 nafs（感覚界にかかわる領域）、悪魔 shayṭān（妄想を語る領域）、理性 ʻaql（理性の生み出すもの maʻqūlāt を語る領域）、知 ʻilm（知識を求める領域）、清貧 faqr（事物の所有へのこだわりを捨て神のみを必要をとする「無」の領域）、神の唯一性 Tawḥīd（唯一の本質）が示され、王（カリフ）が父親として、これらの息子の質問に答えるという形で物語は進む。六人の息子が担う領域はそれぞれが、とりわけ神学や哲学、法学上の重要な主題であり、アッタールは、いわば、法学や神学などの伝統的な学問の領域では解明しきれない人間の魂の深淵を、卓抜な喩を通じて、当時の一般の人々に伝えようとしたように思える。例えば、理性という息子がつかさどる「理性による世界」でアッタールが伝えようとしたものの内実に接しようとするなら、これに係わる部分の逸話を注意深く読む以外に手立てはない。当時の知的選良たちの高度な学問は、アッタールの言葉を通じて始めて一般の人々の心に届く可能性を得たといえる、ただし、法学とか神学とかとは別次元の道筋で、ということである。

魂（および、魂を持つ人間）が、理性、経験的知の領域などといかにかかわるのか、という『神の書』の設定自体の曖昧さも気になるところだが、魂が魂に向かって世界の深層と神に至る修養の神髄を伝授するという構造は、神秘主義の導師と弟子

の関係を想起させるものである。とりわけ、弟子である、六人の息子の魂が質問をし、王でありカリフでもある父が応えるという物語の特殊な在り方を明示させ、六人の息子へのそれぞれの答えに対応した内容として本文が読めるように、本訳書の目次などにもそれがわかるような工夫があれば、内容もさらにわかりやすく、アッタールの真意が伝わりやすいのではないかと思われた。

この「序章」の最後に語られる、「すべては言葉によらずしては限られた世界「（天の）護持された書板」［クルアーン八五：二二］も言葉に包摂される」に関連した詩句には、『神の書』の本質が言葉と理性に深く係わるものであることが語られている。

あらゆる直観的把握と暗示は
いかようにも言葉で表現できる
こうした明証から、理性には明らかとなった
名前（名称）asmā の中で理性こそが言葉そのものであることが
（第四六〇―四六一句：本訳書二四頁）

ここにいう言葉が「ロゴス」を指しているという説もある通り、ここに語られた句は、『神の書』を支える思想が言葉による表現可能性への意志に貫かれている点とともに、アッタールの言語観が彼の認識の方法と結びついていることを示唆している。

『神の書』の数ある洞察に満ちた言葉の中でも、しばしば引用される詩句にもそれは現れている。我々の経験が生きる感覚的現象界にかかわる知の言葉と、陶酔の中で霊的世界を語る霊知の言葉、という相関する二つの「言葉」の世界が、そのままアッタールの世界認識に結び付いているともいえよう。

知の言葉は太陽の如くに沸き立ち
霊知の言葉は、久遠の沈黙
（六四八〇句：本訳書四八八頁）

息子の魂に問われる数々の質問は、霊知の言葉を介して我々に伝えられる一方で、その過程には、「理性」もおおらかに、その姿を現わしている。こうした視点からすれば、訳者が解説の中で、とりわけ本書におけるその重要性を指摘する「理性ある狂者」（本訳書：五四五頁）という表現には興味深いものがあり、神秘主義言説の一つの特異な系譜を考える上で、さらなる考察の対象となるかと思われた。

訳者は、本書を必ずしもイスラーム神秘主義に特化したものでなく、より一般的で、広い意味での逸話や物語の集成として、中世ペルシアの一つの読み物として日本語に訳出しているという印象がある。本訳書の副題には「イスラーム神秘主義と自分探しの旅」とあるが、神秘主義にかかわらず、中世以来、「己を知る者は、神を識る」（第四代正統カリフ、シーア派初代イマームのアリーの言葉とされる）という伝承が知られているし、訳者自身も本訳書の解説の中で、シブリーを引用しつつ、アッタールは、「神は自分の内に在る」という考え方の継承者であると明言している。その意味では、神秘主義的な考え方に照らせば、敢えて『神の書』に副題を挙げるとするなら、例えば、「内

なる自己と向き合う」、とか、むしろ「自己との邂逅・出会い」といった表現の方が無理なく、自然な印象をもつが、おそらく、訳者は、解説にもある通り、一般的な意味で、この作品に読者各自が自分の人生を重ねて読み取ってほしいという願いを込めて、『神の書』に続く副題として敢えて「自分探し」と銘打ったものと思われる。この点は、イスラーム神秘主義自体に関心を抱く読者にも違和感がないように、今少しわかりやすく説明しておいた方が丁寧であるように思えた。

天賦の詩人アッタールの詩作品を、すべて通常の文章で訳出しているので、訳文が、時に必要以上に説明調になっており、詩のテクストがもつ興趣が薄れるのは仕方がないが、神秘主義やアッタール独自の考え方が現れていると思われる箇所が、日本語の文章を通じては気が付きにくい印象を持った。

また、訳語として、表現上若干問題があると思われた箇所（例えば、二二七頁：右から四行目、「愛しい神から肢体を切り離してみてはならない」の「愛しい神」は原文では「恋人」とあり、この「恋人」が神であるとしても、即物的に「神の肢体を切り離す」といった表現には工夫が必要であろう。ここでは美的秩序の調和、統一性が語られている。）が散見される。また、四七六頁左から七行目以降に、「神はあまりに偉大すぎ、多くの善なる性質をおもちだったため、人間は自分をその性質の範囲内で人間にお示しになった…」とあるが、テクストでは「神は被造物によって（被造物を通じて）世界に現れた」（六三〇八句）となっており、本文中の詩句の翻訳に注釈のような説明の文章をそのまま入れるにも工夫がほしい。こうした箇所は、典拠を明示しつつ、テクストと分けて説明した方がよいかと思われる。神秘家アッタールはテクストの言葉にしか現れていない以上、まずは何よりもアッタールの言葉に沿って正確に訳出した上で、注釈などで説明すべきであると思われた。

事実関係に関連しては、特に以下の二箇所についてのみ触れておく。

五〇四頁：バシャル・ハーフィーのバシャルの発音は、通常は、ビシュル（ビシュリ）・ハーフィー。

五二七頁・註（10）：バーヤズィードの酔言「スブハーニー・マー・アアザマ・シャアニー」は、訳者の解釈も尊重されるべきだが、「我に栄光あれ、我が心的境地はなんと偉大なるかな」、あるいは、「我に栄光あれ、我が心的境地より偉大なものはなし」とする解釈が一般的ではないかと思われる。

（藤井守男）